

# 石狩川河口左岸で採取された穴のある漂着コハク

Sea amber with a hole collected on the left bank  
of mouth of the Ishikari River

石橋 孝夫\*

Takao ISHIBASHI\*

キーワード：コハク，コハク製装身具，漂着コハク

## はじめに

2020年夏，石狩川河口左岸で小さな穴のある漂着コハクを採取した。この付近ではよくコハクを採取するが（図1），このような例は初めてだった。以下に述べるように，これは人工物で縄文人など大昔の人々の装身具で，遺跡から流出した可能性が高い。石狩市内の遺跡ではこのようなコハク製装身具と原石が出土する。おそらく当時の

人々も漂着コハクを入手するため，河口や海辺に出かけていたのだろう。本稿では採取されたコハク製装身具と同様な遺物が出土した遺跡について紹介する。

## 1. 石狩川河口付近の漂着コハクと関連事項

石狩川河口付近（図2）はコハクがよく漂着する（石橋，2014）。まずはじめに，この付近のコ



図1. 漂着コハク.



図2. 石狩川河口付近.

\*いしかり砂丘の風資料館（学芸協力員） 〒061-3372 北海道石狩市弁天町30-4

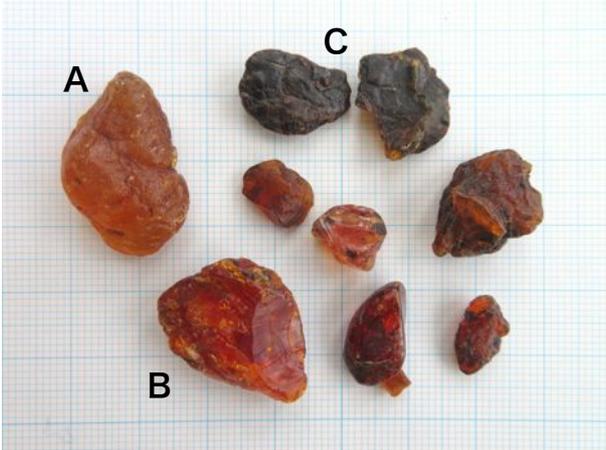


図3. 2018年5月7日採取のコハク。



図4. 周囲に石炭が残るコハク。

コハクの漂着状況について述べる。図3は2018年5月7日、石狩灯台近くの浜から石狩川河口左岸までの約1.5kmの間に採取できたコハクである。色は赤、黄色、褐色などで、Aの薄赤いコハクは長さ23.6mm、幅18.0mm、厚さ7.8mm、重さ1.6g。この日採取した中では最も大きいものだ。またBのコハクは割れ面があり、以前は大きなサイズだったことが覗える。Cの黒褐色の2点のコハクは割れ面がなく、形成時のままの状態と考えられる。この付近で採取されるコハクは、この3例は大きなほうで通常は1cm以下のサイズが多い。また砂浜の砂粒のなかには無数のコハク粒が含まれている。時間の経過とともに波などにもまれ粉々になるのだろう。図4はコハクの周囲に石炭が付着したもので、このコハクが石炭層に含まれていたことを物語っている。周辺の海岸ではコハクだけでなく石炭も多数漂着する。これらの石

炭は、石狩川上流の炭層から流出し、漂着するとみられている（岡村ほか, 2005）。

このような点から考えると漂着するコハクは、石炭とともに流出していると可能性が高い。

コハクの漂着は河口だけでなく、小樽市銭函から厚田区望来のまでの海岸で確認されている。一部では浜益区でも漂着するともいわれているが、筆者は未確認である。厚田区望来のコハク漂着は明治22（1889）年横山壮二郎により報告されている（横山, 1889）。

また、小樽市銭函のコハク漂着については安政4（1857）年に記録されている（玉虫, 1992）。同年、松浦武四郎は雨竜川からヌプシャ（増毛町）へ抜けた際、信砂川上流でコハクを採取している（古田, 1964）。あるいは信砂川河口付近でコハク採取が可能かもしれない。また、日本海側では稚内市の海岸で石炭とコハクが採取できるという（岩崎, 2020）。

松浦武四郎は安政3（1856）年、北蝦夷地（サハリン島南部）東浦のシュマヤ（スタロドゥブスコエ北西）でアイヌの女性がコハク製のシトキ（円形の胸飾り）をしているのを見て、従者の情報で近くの浜でコハクを採取している。その記録に「アンチ（黒い石）」とあるので石炭もあったようで、そこから米粒豆粒大のコハクを採取したと考えられる。なお、現地ではコハクのことを「ロコウ」と呼んでいた（高倉, 1978）。

当時、コハクは下痢止めなど薬として需要があり高値で、北蝦夷地の資源の一つとして注目されていたようだ。安政4（1857）年、北蝦夷地でコハクを集めた記録が残っている。場所は武四郎がコハクを採取したスタロドゥブスコエの南のロレイ（旧露禮）で「500目」のコハクが採取されたという（東, 2006）。「目」が「匁」とすれば500目×3.73gで1800g近いコハクが採取された計算になる。さらにロレイの北では安政5（1858）年には800目（3000g）のコハクが集められたという（箱館奉行所, 1857）。

ちなみに、筆者が2016年5月～9月の5か月間（48日）で石狩河口付近で採取したコハク総量は

228gで当時、サハリン島では相当な量のコハクが採取できたと考えられる。

## 2. 穴のある漂着コハクの採集と特徴

2020年7月26日午前、石狩川河口左岸で1点の細長いコハクを見つけ採取した。採取場所は図5の✕印の場所で石狩川と日本海との接点付近である。当日は図6のように小枝や葉などの漂着物の打寄せラインがあり、問題のコハクはその中にあった。採取時点では穴のあることには気づかず、帰宅後、洗浄してはじめて長軸端部近くに小さな穴があることを確認した。コハクは長さ29mm、幅13mm、厚さ10mm、重さ1gで、この日採取できた中では最大である。当日、採取できたコハクは全部で10粒、重量にして3gだった(図7)。図8は発見直後の写真で、矢印の先に穴が見えている。

図9にコハクの表、裏、側面を示した。色は黄色味を帯びた赤褐色である。形状は細長く、側面の中央付近に自然の突出部がある。このような凹凸は、形成過程でできたとみられる。そして長軸の先端から10mm下に穴がある。穴は両面から開口しており貫通している。表裏とも開口部で直径4mm、貫通部で直径2mmある。穴の内壁に沿って溝状の傷がみられ、尖ったものを回転させ、穿

孔したことがわかる(図10)。海には二枚貝などに穿孔して捕食する貝類も存在するが、表裏から穿孔し貫通する例はない(図11)。したがって表



図5. ✕：穴のある漂着コハク採取地点。



図6. 石狩川河口左岸の状態。



図7. 2021年7月20日に採取した全コハク。



図8. 発見時のコハク。



図9. 穴のある漂着コハク全体 (矢印から矢印= 1 cm) .



図10. 穴の内壁の傷痕 (開口部で径 4 mm) .



図11. ツメタガイによる二枚貝への穿孔 (開口部で径 5 mm) .

裏2方向からの穿孔は、人為的な可能性が高い。こうした穿孔法は遺跡から出土する石製装身具製作に良く用いられる方法で、穴の内壁の傷跡がそれらに類似しており、石製錐によると推定される。

河口では縄文時代中期以降の土器片や石器なども漂着するので、採取された穴のあるコハクは、かつては遺跡の中にあった遺物で形状から垂飾（ペンダント）と思われる。

### 3. 石狩市内出土のコハクの装身具と原石

北海道ではコハクを使った装身具は、今から2万年前、旧石器時代後期から出土する（福井ほか、1999）。その後も縄文時代～続縄文時代前半まで人々に愛用される。約2000年前の続縄文時代までは玉もあるが垂飾が多い。続縄文時代前半になると直径1cm前後で、厚さ5mmほどの「平玉」と呼ばれるビーズ（平玉）が大量生産されるようになる。このビーズは時に、数千個連ねられ首飾りとされることがある。量からみて、北海道内で新たなコハク産地が発見されるか、平玉が北海道外から持ち込まれた可能性が高いが、結論は出ていない（鈴木、2015）。

仮に記述のように幕末期の北蝦夷地のコハク産出状況が続縄文期も同じだと仮定すると続縄文期の大量の平玉は、サハリン島東側のコハクが使用された可能性がある。

石狩市内では大量の平玉が伴う遺跡は未発見であるが、装身具や原石などが出土している（表1）。図12は石狩市内でコハクの装身具や原石な



図12. 石狩市のコハク装身具等が出土した遺跡の分布（遺跡名は表1参照）。

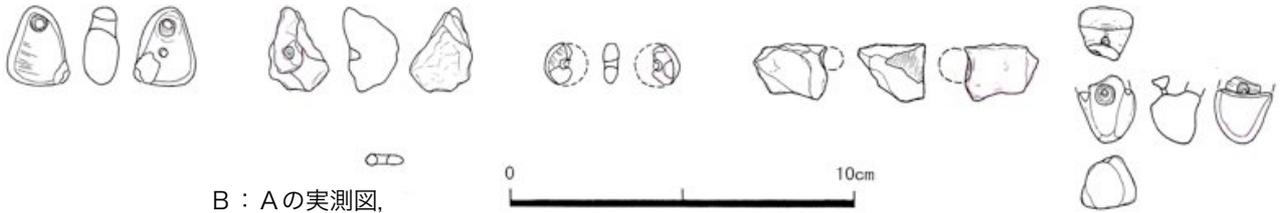
表1. 石狩市内の遺跡出土コハク製装身具等。

遺跡名	時期・推定年代	コハク装身具	コハク原石	備考
①若生C遺跡 (A地区・D地区)	続縄文後期 約1300年前	なし	2点	伴出遺物かどうか不明
②志美第3遺跡	続縄文前期 約2000年前	1	なし	第1号竪穴覆土
③紅葉山51号遺跡 (第2地区)	縄文中期 約4000年前	なし	20点	包含層 選別・搬入か？
④石狩紅葉山49号遺跡	縄文中期 約4000年前	4 平玉？1	73点	包含層 石炭・ヤスリツノガイ共伴
⑤紅葉山33号遺跡	続縄文前半 約2000年前	1 平玉2	なし	墓壇 ヤスリツノガイ・扁平礫玉共伴
⑥紅葉山55号遺跡	続縄文前半 2000年前？	石炭製玉	不明	発掘調査ではない

石橋 孝夫：石狩川河口左岸で採取された穴のある漂着コハク



A：石狩紅葉山49号遺跡コハク製装身具.



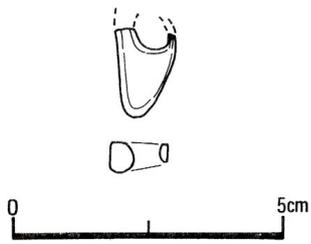
B：Aの実測図.



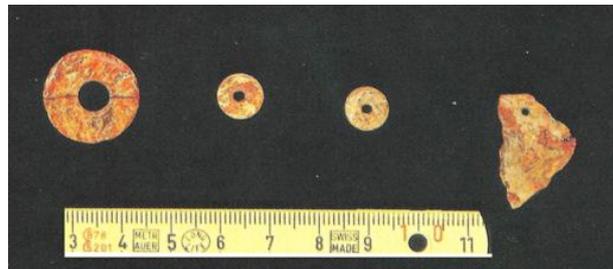
C：コハク原石.



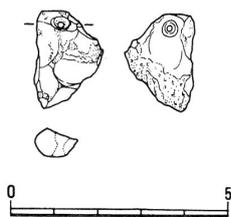
D：ヤスリツノガイ化石（石狩紅葉山49号遺跡）.



E：志美第3遺跡コハク製装身具  
（藤田・石橋, 1979）.



F：紅葉山33号遺跡コハク製平玉.



G：コハク装身具.



H：扁平礫製の玉（石橋・清水, 1984）.

図13. 石狩市内の遺跡出土のコハクの装身具・原石, 化石, 扁平礫の玉.

どが出土した遺跡の位置である。いずれも石狩川と旧流路の茨戸川、支流の発寒川沿いに位置している。時代的には縄文時代中期後半（約4000年前）～続縄文時代後期（約800年前）までの遺跡である。①若生C遺跡では長さ5cmを超える大型のコハク原石が出土している（石橋ほか, 1975; 1977; 2014）。ただ遺跡は続縄文時代末期でコハク利用がほとんどみられなくなる時期で、伴出遺物かどうか疑問がある。図12の②～⑤の4遺跡ではコハク製装身具や原石が出土している（図13）。とくに③の紅葉山51号遺跡ではコハク原石20点が出土している。そのうち、12点が長さ13mm～30mmと比較的大型のもので、選別された可能性がある（森田・工藤, 2003）。④の石狩紅葉山49号遺跡では原石に穴をあけただけの今回採取された穴のある漂着コハクに類似した装身具とその未成品が出土している（石橋・西方, 2005）。なお⑥の紅葉山55号遺跡ではコハクではないが、石炭玉が出土している（河野ほか, 1972）。この玉は冒頭述べた漂着石炭で製作された可能性が高く、関連する遺物として記載した。

#### 4. おわりに

以上述べたように、石狩川河口で採取した「穴のある漂着コハク」は縄文時代から続縄文時代の装身具で遺跡からの流出物と考えられる。石狩市内の遺跡ではコハク製品や原石のほかにヤスリツノガイの化石・扁平礫を加工した装身具も出土している。これらも石狩浜から望来層の露出する海岸部で採取した可能性が高い。

続縄文時代の平玉を別にすると、コハクの装身具と原石が共伴する遺跡は市内だけでなく、札幌市や苫小牧市などにも分布する。今のところ石狩低地の太平洋側ではコハク産地は知られていないことから、石狩海岸で採取されたコハクが、運ばれた可能性が考えられる。

石狩浜などに漂着するコハクの産地については化学分析の結果、石狩川上流域の産炭地ではなく、サハリン島あるいは同じ特徴をもつ石炭鉱床

から流出したという分析がある（小笠原・原, 2005; 原, 2014）。しかし、筆者は石狩湾岸に漂着するコハク及び縄文時代のコハクの産地は海流の状況や石狩湾内で石炭層が確認されていないことから、なお検討の余地があると考えている。

#### 引用文献

- 東俊佑, 2006. 北蝦夷地在住・栗山太平の活動. 北海道開拓記念館紀要, 34: 57-79.
- 福井淳一・越田賢一郎, 1999. 千歳市柏台1遺跡 一般国道337号新千歳空港関連工事埋蔵文化財発掘調査報告書 第138集. 財団法人北海道埋蔵文化財センター.
- 藤田登・石橋孝夫, 1979. SHIBISHIUSU II 花畔砂堤列における縄文晩期の住居址・竪穴群・墓地発掘の記録 第3遺跡. 石狩町教育委員会.
- 古田武三, 1964. 拾遺松浦武四郎 丁巳石狩日誌. 三省堂. 323-347.
- 箱館奉行所, 1857. 東浦海岸琥珀取土人へ代品給与方願並に同代品仕訳書 (北海道立文書館所蔵 箱館奉行所文書 御用留 北蝦夷地仕出之部 安政四巳年三月 簿書番号00024 北海道立文書館デジタルアーカイブズ). [http://www.pref.hokkaido.lg.jp/sm/mnj/monjokan\\_digital\\_archive.html](http://www.pref.hokkaido.lg.jp/sm/mnj/monjokan_digital_archive.html)
- 原奈々絵, 2014. テルパン類のGC-MS分析による北日本の遺跡出土琥珀の分類. 玉文化, 11: 59-94.
- 石橋孝夫・横山英介, 1975. WAKKAOI 石狩・八幡町ワッカオイ地点緊急発掘報告書. 石狩町教育委員会.
- 石橋孝夫・清水雅男・須賀龍治・直井孝一・鮑津博史, 1977. WAKKAOI III 石狩・八幡町遺跡ワッカオイ地点D地区発掘調査報告書. 石狩町教育委員会.
- 石橋孝夫・清水雅男, 1984. 紅葉山33号遺跡 紅葉山砂丘における続縄文時代前半期の墓地発掘の記録. 石狩町教育委員会.
- 石橋孝夫・西方麻由ほか, 2005. 石狩紅葉山49号遺跡発掘調査報告書 伏籠川総合治水対策特定河川事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書. 石狩教育委員会.
- 石橋孝夫, 2014. 石狩浜漂着物考古学ノート1 石狩浜の漂着遺物とその履歴. いしかり砂丘の風資料館紀要, 4: 41-54.
- 岩崎秀紀, 2020. ほっかいどう道北どんぶらこ 礼文島

編No.1. 漂着物学会会報どんぶらこ, 65:3.

河野本道・藤村久和・岩崎隆人, 1972. 石狩町の先史時代. 石狩町誌上巻, 石狩町, 116-178.

森田知忠・工藤義衛, 2003. 紅葉山51号遺跡(第2地区). 石狩市東土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書, 石狩市教育員委員会.

小笠原正明・原奈々絵, 2005. 石狩紅葉山49号遺跡出土琥珀の産地推定. 石狩紅葉山49号遺跡発掘調査報告書, 石狩市教育委員会, 8-70.

岡村聡・田中沙織・門馬弥生・菅原香菜子, 2005. 石狩湾厚田海岸に打ち寄せる石炭の起源. 環境教育研究, 8:19-26.

鈴木克彦, 2015. 北海道・先史琥珀玉文化の系譜と文化的・歴史的意義. 玉文化, 12:1-23.

高倉新一郎, 1978. 高倉新一郎解説竹四郎廻浦日記, 607.

玉虫左太夫・解説稲葉一郎, 1992. 入北記. 蝦夷地・樺太巡見日誌, 67.

横山壮次郎, 1889. 北海道ノ琥珀及建築材. 地学雑誌, 1(3):13-114.